

小頭岳

H・22・3・12(金)
新合地区振興会
振興会便り
文責:佐々木 元
NO. 10

= 新生活運動についてお知らせとお願い =

天草市全体の公民館活動の一環として、新生活運動に取り組むことになりました。すでに各地区で取り組んでいるところは、それを尊重することになりましたのでお知らせをいたします。
天草市全体の新生活運動については、各地区の公民館に掲示する予定ですので、参考にしたときはそれを基準にしていだけばと思います。
(河浦町各公民館長)

長寿の秘訣

食欲がありよく食べる。
くよくよしない性格である。
仕事をよくしていた。体を動かし鍛えていた。
(70歳代は草刈機をかつぎ、90歳までゲートボールをしていた。)

井上チエさん(立原・村迫)97歳に聞きました。

“ ありがとうございます ”

ふるさと応援寄附金として前回紹介(No.4)した後で2名の方から合計75,000円の浄財をいただきました。ふるさとへの思いを強く感じます。「ふるさと応援交付金(寄金積立)」に入れました。地元もその思いにしっかり応えなければと痛感します。

新年には新合公民館(出張所)に毎年立派な門松が設置されていますが、これは市平地区の「何かしゅうかい(どろんこ)のメンバーの人達にボランティアで作っていただいたものです。新春にあたり、立派な門松で新合のスタートができてとてもうれしい限りです。 感謝 !!

< お知らせ >

1/1
新年祝賀式 出席者 35名

1/24
地域総合学習の会 閉講式
交通安全教育講話 参加者 40名

腹話術や安全タスキ等で楽しく学習できました。
閉講式も併せて行いました。
ご協力ありがとうございました。

「米と漬物」でふるさと家族便を検討 ～ 第5回 まちづくり検討委員会 ～

第5回 まちづくり検討委員会を2月19日に開催しました。今回は具体的な取り組みの検討を中心に話し合いました。
まず、3つの報告から話し合いを進めました。1つ目は2月9日河浦まちづくり協議会主催で下田南地区振興会の「ふるさと家族便」研修(3名参加)について、2つ目は2月14日五和町の「つんでフェスタ」の研修(1名参加)について、3つ目は吉田多計至さんから振興会で「新合の米」を生かす方法について検討してほしいという要望についての報告でした。これをもとに各自の考えを出し合い検討をした結果、新合の米は美味しいし、漬物もあって当面資金面もさほどいらぬので「ふるさと家族便(仮称)」として取り組めるのではないかとすることがまとまりました。次回は4月に開催予定ですが細かな取り組みの検討をすすめていくこととなります。住民のかたの多くのご意見をお聞かせください。



< 閉講式で熱心に話を聞く参加者 >

腹話術と聞きつけて小学生の参加もありました

雨が走り 雪が舞う
風が騒ぐ 日照が居座る
自然は気まぐれだ

それでも 稲は稔り
そばは実をつけ
野菜はいきいきと旬を伝える

それは そこに携わる人の
やさしさがあるから

愛があるから
強い心があるから

あそ望郷くぎの
「旬鮮あじわい館」より

交通安全に全力を !!

再三にわたる交通安全についての呼びかけや学習会・条件整備など、いろいろ力を入れてきましたが、最近また国道での交通事故が発生しました。通勤や観光客で交通量が増加、更に道路事情が良くなったのスピードの出しすぎなど、安全面の不安がたえません。

新合地区安全協会の武内さんや坂本さん達の努力で、下記の5ヶ所にカ・ブミラーを設置するよう業者に発注してあります。

- 1. 村迫の里道
 - 2. 市道山川線
 - 3. 市道市ノ瀬小塚線
 - 4. 下津留公民館前三叉路
 - 5. 市ノ瀬三叉路(国道・県道)
- その他、山川(宮野河内方面への)案内板も計画してあります。

“ みんなで再度、交通安全に力を入れましょう ”



< 棚田で作業中の丸塚さん >

『道路工夫物語』(3)

車を止め、コッペパンをかうと臨時で雇っていた人夫が自分達にも食べさせてくれるものと期待して待っていたが、工事の現場まで行く間に食べてしまっていた。人に「おごる」お金の余裕がなかった。しかし、夕方、卸屋の車が残り物をくれた時はみんなにふるまっていた。人夫といえば昭和35年の熊本国体の時である。聖火リレーのため道路の整備を特別する指示があった。上司から「人夫は何人でもよい。」ということだったので、30人ほど頼んで来てもらっていたら、上司があわてて「明日から2・3人にしてくれ」といったことがあった。当時は人夫をたのむとよく集まってくれた。

最後に大久保さんが「そのころの人夫は仕事をよくしてくれる人ばかりだった。」と話されたときは尊敬と感謝の表情に変わっていた。
道路工夫を長年やっているといゆかいなことも多いがそれは次回で。

がんばってま～す!

真土(まつち)に生きる ～ 丸塚英夫・高恵夫妻

丸塚英夫さんに案内され、家の横から畑を通り山道を登るとやがて、約50m程山をくりぬいた道を歩く。すると視界にみごとな棚田が飛び込む。一瞬どこの世界に迷い込んだかと思う程の周囲を山に囲まれた予期せぬ棚田の出現である。江戸時代の隠し田を想起させる。ここに田が7反3畝・畑4畝あり、丸塚英夫・高恵夫妻の日々の仕事場がある。ここは真土(まつち)とよばれる地層で、ほとんど石がなく、粘土質か砂地であって、知る人ぞ知る「真土の米」ができる田なのである。

新合の米は美味しいとの評判であるがこの真土の米は格別うまいという。ところが、この真土の層は平床から越ノ河内～上松中～大丸～立原の山間部に細長く続きごく一部にしかないとのこと。山際にあるため今は作る人も少なくなり4～5人が耕作しているにすぎないという。その中でも丸塚さんは先祖代々の田畑を守り続け、真土の耕作では面積・収量は新合一だと周囲の弁。

米作りでは特にまわりの『ち茅』を中心にカッターで短く切り積んで、1年に2回程切り返してから使う。牛糞は入れないとのこと。きれいに積んである茅が数力所にみられた。周囲の土手やあぜの草を切り、運んでカッターで切り、積んで切り返す。これだけでも大変な作業である。奥さんに「これは誰がするんですか?」と聞くと「私にさせらっとですばい」とにこやかに話され、英夫さんに聞くと「おるもすつとばなあ」との事。大変だが夫婦で真土米作りを楽しんでおられる感じであった。

この堆肥作りや夏場の水の少ないこと、大型機械が使えない事の悩みの他にここ数年米に澱粉質が多くなり、味がおちてきていることが気がかりという。温暖化の影響ではないかと心配しておられた。祖父の頃は今より狭かったということである。石工であった祖父が小川の流れを山手に変え、少しずつ広げて今の広さになったという。今年は雨がが多く棚田の石垣が6ヶ所も崩れたという。築き直した新しい石垣が見えたが、雨が強く仕事ははかどらないと嘆いておられた。

「災害にかけたら」というと「重機も通らず自分でするしかない」との事。田は全て耕され周囲の土手もきれいに草刈りがなされていた。棚田を囲む山は30年生の杉山。これも下草刈・枝打ちもされた見事な美林である。

このように、丸塚さん夫妻の誠実な人柄と先祖への思いを大切にしながら、自然の恩恵を生かした真土米づくりへの情熱は、私たちの胸を打つ。そこには百姓の精神が脈々と受け継がれ流れているのを強く感じた。

真土(真砂土)... まつち(まさど)

主に関西以西の山などに広く分布している花崗岩が風化した土壌。単に真砂(まさご)とも呼ばれる。特徴としては水はけ、水持ち、保肥力が良い半面、粘土分が多いので通気性や水はけが悪く弱酸性。